

**「鎮守の森と”壱岐る道”水の循環編
-永田川水系流域の”浦”と”触”を歩く-他多数」**

壱岐島における鎮守の森コミュニティ・プロジェクト
ウェル・ビーイング(心身の健康)編
令和6年度地域調査と実証ワークにおける考察

2025年2月28日

鎮守の森コミュニティ研究所 特別研究員 倉橋陽子
山の上のヨガ教室主宰/ヨガ療法学会所属

目次:

1、はじめに

2、要約

3、実証ワーク及び調査報告書

(1) 実証ワーク「沓岐る道」水の循環編永田川水系流域の”浦”と”触”を歩く

- A. 郷ノ浦港から河口周辺
- B. 交流の玄関口「郷ノ浦商店街」と寒神社
- C. 常盤井
- D. 武生水第6水源から永田ダム

(2) 潮の満ち引き瞑想と海の御旅所

- A. 潮の満ち引き瞑想 in 小島神社
- B. 海の御旅所-比賣神社(里触)-

(3) 暮らしの中の森林「せどん山」と民間信仰「子ども相撲」

(4) 番外編：戸隠神社追儺祭参仕から見える日本の精神性「鬼と来訪神」

4、社会実装に向けて

- (1) 報告座談会
- (2) 訪問後の意見交換

5、成果物

1、はじめに

杵岐島における鎮守の森コミュニティ・プロジェクト/ウェル・ビーイング(心身の健康)編/令和4年度の地域調査と実証ワークでは、人的資源、地域自然資源、施設資源など、杵岐の市民と杵岐ならではの地域資源を掘り起こしてきた。令和5年度の地域調査と実証ワークでは、鎮守の森における心身の癒しには、「スピリチュアル・スケープ」が重要であり、その土地が物理的にも無理がない状態を言葉でない伝承として作用し、信仰が地域の自然を持続可能とする装置となり、また、それらを読み解くプロセス自体が心身の癒しに貢献すると結論づけた。鎮守の森における心身の癒しのアプローチは、①身体アプローチを重視、②コミュニティの安全性、③自然の中でのアプローチ、④長期的な時間軸を意識する、⑤自然信仰・民間信仰の特性を生かす、と⑤を新たに加え、再定義した。

令和6年度では、これらの定義を元にして、杵岐全体として捉えた視点から”歩ける距離感”と”流域”に着目した視点で調査する。視点の粒度を細やかにすることで、土地に刻まれた暮らしと風土をアクティブ・ラーニングすることが、”自然と共鳴”する。アカデミック・ウェルビーイング実証ワークを通して、社会実装へ近づくことを今年度の目的とした。

2、要約

鎮守の森における心身の癒しには、本来の暮らしの中に根づいた在来信仰を通して、その土地の一部となる体験は、「自然の子として社会に生きる」ことが自然と身につく空間である「スピリチュアル・スケープ」の中に身をおくことで効果的に働く。

ストレスが原因となって身体に不調がくる心身症の深層の部分である本来態へのアプローチには「自然の子への気づき」が重要だと心身医療の中でも位置付けられている。地域の自然循環や自然信仰を読み解くプロセスで、三つの作用が、心身の癒しに貢献する。一つ目は、先祖や先人から残してもらった恩恵や時間軸の長さを理解する。二つ目は、自然信仰は自然と人間の共鳴共振であることを体感する。三つ目は、私たちはどこからきてどこに帰っていくのかという死生観に目を向けさせる。

そのためには、その土地の自然信仰や民間信仰(自然と人間との共鳴)を理解する過程が、心身の癒しにつながる。それは私たちがどこからきてどこに帰っていくのかの死生観とも関わる。つまり、よりよく生きようとする力は、自然に対する感受性の広がり、共鳴共振の中に現れる。

特に今回は「杵岐る道：水循環を意識して水域を歩く」ことが、歩くからこそ気づくWakableCityの重要性と土中に深く入り込んでわかりにくくなっている水循環の重要性を、信仰という装置、スピリチュアル・スケープによって、気づきに貢献することも実証できた。もともと、湧水は地域にとって命の水であったが、上下水道が引かれるとともに、その重要性に気づきにくくなっている。しかし先人たちが信仰という形で残してくれたスピリチュアル・スケープは、時空を超えて、その重要性を伝えてくれる。それはその土地の防災にも関わる仕組みであることも実際に歩くことで深く理解できた。

歩かないとわからない発見が、住んでいる杵岐市の住民の方々にもあった。すでに地域愛が強いメンバーであったが、どの井戸もルートも初めて歩く。また反応が正直な子どもたちは、暑さで最初渋っていたのが、水にふれ、見たことがない景色や感覚に触れることで、目に見えて元気に生き活きとしてきた。実際に常盤井には二日間通い、その後、図書館にも足を運び調べる大人の姿で、学ぶ楽しさを伝えられたように感じる。子どもたちに向けてのアカデミック・ウェルビーイングになることも実証できた。

鎮守の森における心身の癒しのアプローチは、今年度から「自然信仰・民間信仰の特性を生かす」を加えることとした。①身体アプローチを重視、②コミュニティの安全性、③自然の中でのアプローチ、④長期的な時間軸を意識する、⑤自然信仰・民間信仰の特性を生かす、と再定義したうちの、⑤を加えたことによって、杵岐だからこそ残っている信仰の過程が、ミルフィーユ状に在来信仰として、それを後世に伝える石祠などの形で残っているため、「わかりやすく」大切であると、歩いて気づくことが実証できた。それぞれの土地に刻まれた歴史と風土、地域の特徴的な信仰をアクティブ・ラーニングを通して学んだ今回の永田川水系の流域を意識した体験は、「自然と共鳴」するプロセスともなり、心身の癒しとなる。自らは生命循環の一部であることを身体で理解し「自然の子として社会に生きる」ことで地域の自然循環に”楽しみながら貢献”し、自然と地域の課題にも気づいていく。

同時に、住んでいる人たちにとっての信仰、祈りの場所に「お邪魔させてもらっている」そして「また違う形でお返しをしていく」そんな謙虚な気持ちと畏敬の念を伝えることなくして、ウェルビーイング・プログラムとは言えない。さまざま地域の信仰と祈りの場を旅してきた筆者にとって、この気持ちを持たずして、訪れるべきではないと

まで思っている。あの世とこの世の境目の曖昧さが暮らしの中にある今、その感性を養うことこそ、この信仰と祈りがいつの時期でも当たり前にある吉岐島における鎮守の森コミュニティ・プロジェクトの大切なミッションなのだ、再確認した。

今回の郷ノ浦エリアの歩ける範囲で、どのようなウェルビーイング・コンテンツができるかを構想したビジョン・マップ案も提示する。どのように今後につながっていくかは、来訪者として後押ししつつ、地元の機運醸成をどのようにつくっていくかが、今後の課題である。

3、実証ワーク及び調査報告

鎮守の森における心身の癒しのアプローチは、①身体アプローチを重視、②コミュニティの安全性、③自然の中でのアプローチ、④長期的な時間軸を意識する、⑤自然信仰・民間信仰の特性を生かす、視点から構築した実証ワークを通して、壱岐の特徴的な営み、暮らし、自然信仰、民間信仰を調査した。

(1)実証ワーク「壱岐る道」水の循環編 永田川水系流域の”浦”と”触”を歩く

(1)ー1、実証ワーク概要

まだまだ暑い時期だったため一日中歩くのは、安全性に欠けるので、2024年9月14日(土)14:00-16:00には「触」エリア、9月15日(日)9:00～12:00には「浦」エリアと二つに分けて実証ワークを行った。壱岐島には「浦」と「触」と呼ばれる集落カテゴリーがあり、「触」は内陸地で「浦」は海岸沿いである。現在の住所でも使われている。歩くことで目線が暮らしのサイズになり、また身体性がともなう体験となる。

今回歩く範囲は、永田川水系の流域である。壱岐で一番大きな河川「幡鉾川」流域は下記の地図1なのだが、あえて以下の地図2:YAMAP流域地図「永田川水系」の黄色で囲ったエリアに絞った。このエリアを選んだ理由は、海の出口は郷ノ浦港となっており、今後、社会実装をしていくにあたって、博多港から一番アクセスの多い郷ノ浦港から歩いてでも体験することができることを重視したためである。また、最も営みがある浦と触を繋ぐ市(いち)の発展である商店街とも接続しているため、今後の壱岐市のモデルエリアになれる可能性も考慮して選択した。この二つの河川はともに壱岐島で一番高い山、岳の辻から派生している。



地図1:YAMAP流域地図「幡鉾川水系」

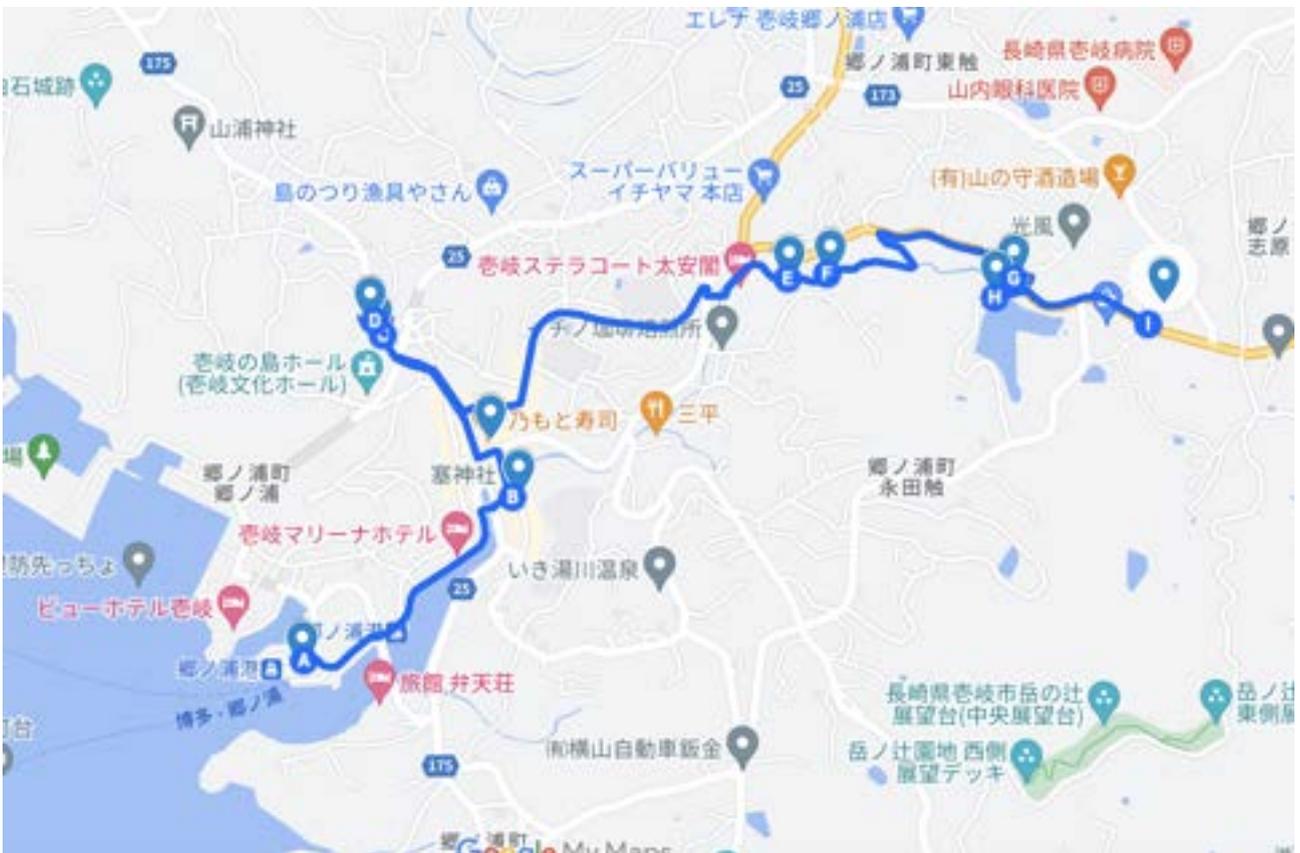


地図2:YAMAP流域地図「永田川水系」

地図3の永田川の流域の河口である郷ノ浦港をスタートとして、地図4のGoogleマップで事前に調査した湧水ポイントや水源、水に関わる信仰エリアを訪れながら歩いた。



地図3: YAMAP流域地図、郷ノ浦港と永田川流域



地図4: Googleマップ

<https://www.google.com/maps/d/edit?mid=1TRIYvsrniuKBCZO6xzKaHFD-rdls34&usp=sharing>

- 香崎市観光漁業郷ノ浦漁業観光...
- 塞神社
- スタゴドン堂
- 香崎七尾水 常盤軒
- 武生水築山水塔
- 永田第3水塔
- 永田ダム公園
- 永田ダム
- 塞神社
- 乃もと寿司

上記ルートは合計で4.6kmとなり、中村研究員の修士論文である「水循環のプラネタリーヘルスに関する研究」で昨年香崎島でも実施したDeepTimeWalk(シューマツハカレッジ考案)の香崎版として「香崎の道」とした趣旨を意識した距離設計にすることで、全ての道のりで、地球46億年を体験するDeepTimeWalkにも繋げることができる。

(1)ー2、アプローチ別内容

アプローチ	内容
①身体アプローチを重視	永田川水系流域を実際に「歩く」 見つけた水に関する暮らしの行為を体験する
②コミュニティの安全性	参加者は親子、親友同士である吉岐の住民。
③自然の中でのアプローチ	海からのスタート「浦」から川に沿ってを上流に歩く。 水にふれ、観察する。
④長期的な時間軸を意識する	山からの水が川を流れて海に届くまでの長い時間。 祠や湧水エリアが昔から守られてきた先人の想い。
⑤自然信仰・民間信仰の特性を生かす	水に関係する祠、神社に寄りながら、その特徴を探る。

(1)ー3、エリア別内容を所感

A.郷ノ浦港から河口周辺



写真左：大きな河口・吉岐の焼酎を運ぶ交流拠点
写真右：郷ノ浦港内、観光案内も多く、人々の交易の場であったことが見て取れる。



写真右：
古来船交易のモニュメントに子どもたちも興味津々。直前まで暑さに嘆いていたのが嘘のよう。

写真左：
護岸整備された川と道路

護岸の橋の上には、鬼退治のモニュメント(写真右)がある。台座に刻ま

れた説明文には、次のようにあった。

「百合若大臣の鬼退治

昔、壹岐の島は五万の鬼が住む鬼ヶ島で悪毒王と名の大將が治めていた。鬼は島の人々を苦しめ、その悪行ぶりは都にまで聞こえていた。

そこで都の百合若大臣という武者が鬼退治のため、壹岐につかわされた。大臣は奮戦の末 鬼どもを退治し、最後は悪毒王との一騎打ちとなったが、大臣は見事に王の首を打ち落とした。

ところが王の首は空高く舞い上がって消えてしまった。天に首をつなぐ薬を取りに行ったのだ。大臣は王の胴体を岩影に隠して待っていた。やがて首は戻ってきたが行く所がない。そこで大臣の兜に噛みつき必死になって抵抗したが、ついに絶命した。

こうして鬼どもは退治され、壹岐の島に平和が訪れたという。」

諸説ある伝説ではあるが、壹岐は鯨満国と呼ばれる「鬼ヶ島」だったとされる。「鬼」の解釈で日本の心の変遷がわかるとした小山聡子(二松学舎大学文学部)教授は、「鬼は古代から今に至るまで日本人の心に影響を与えてきました。その存在を人々はどのように受け止め、伝えてきたのか。鬼の系譜をたどることは、日本人の精神世界をのぞきこむことにもなります」と述べている。壹岐島における元寇を現していることは推測できるが、藩政時代、壹岐を支配したのは平戸藩の松浦氏であった。松浦氏は鬼退治で有名な渡辺綱を先祖とする。今回の趣旨とは横道にそれるが、心の変遷を辿るキーである「鬼」に今後も注目していきたい。



B. 交流の玄関口「郷ノ浦商店街」と寒神社

写真左：ふれ愛通り商店街入り口 写真右：寒神社



交易の玄関口である外からの恵みとともに、令和5年の調査でもわかった最も数多く祀られていた天然痘を祓う神々が多数で島で恐れられていた天然痘などを避ける意味合いのある場所、防塞(疫神の防障道路主護)の神でもある。まさに島の玄関口である河口ならではの。

掲示には以下のように書かれていた。

「寒神社由来

生まれ、生き、そして土への回帰。永却の輪廻の中で人間はなお、生への執着から性に祈る。

あめのうずめのみこと神代の昔、天の石屋戸の裸踊りで知られる女神天宇受売命は、後に異形の男神猿田毘古神と結ばれ、猿女君として以来一体の神となった。元来猿田彦が庚神様となり、防寒(疫神の防障道路主護)の神として信仰されたが、この地の神はいついつ頃より祀られたか定かではない。はっきりしているのは現在田河深江字下ルに奉られていた寒神を、天保年間この地下ル町に奉遷宮して町の氏神としたことである。本殿には女石が祀られているが、これは女神猿女命をあらわし、昔から本町元居浦の八坂神社の男神は毎年祇園祭典に必ず来興し神楽も奉納される。

女神であることから良縁、安産、夫婦和合、性の病、子供の守護、に靈験あらたかと言われているが本来道の神であるため交通安全を祈る人も多く明治末期までは吉岐島に上陸した男達は男根を女神に見せないと怪我をするといつてこの寒神社に一物の御照覧を願ったもので。近年は島以外の間でもとみに知られ、何を祈るか丑満に女性の詣りが多い。」



写真左: 寒神社内には男根シンボル

写真右: 飲料できないと書いていたので、井戸水の可能性がある御手水。

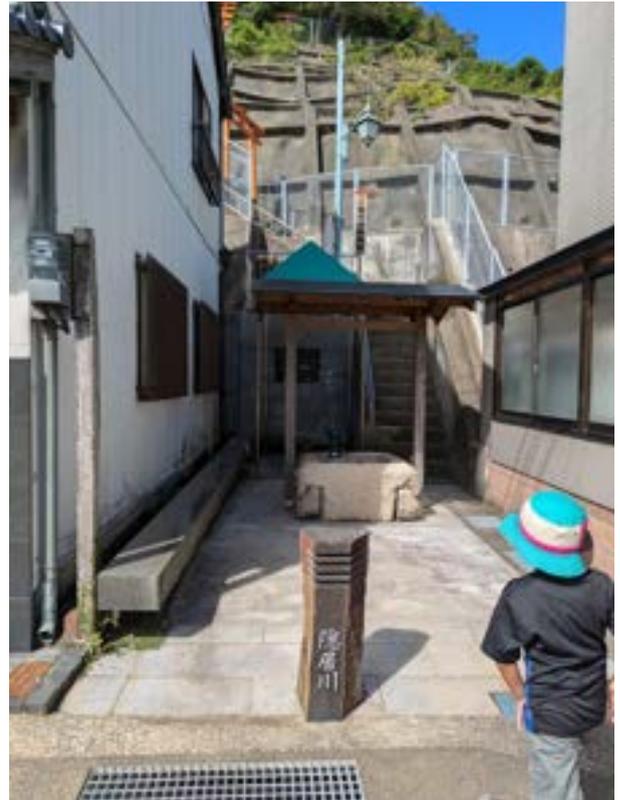


写真左下: 商店街地図で俯瞰してみると市である形。

浦と舐の交流拠点であることがよくわかる。Googleでも掲載されなかった「金比羅公園」の下に金比羅神社を発見。



写真右下: 歩かないとわからなかった家と家の間をかうじて流れる永田川。



写真左: 唯一の鎮守の森が緑を蓄えていた「金比羅神社」とその鳥居。
その下に、現役の汲み井戸を発見。その前には「隠居川」の碑があり、道路の下に水路のようだが支流がある
ことがわかった。
写真右: 今でも現役の組み上げポンプ。子どもたちも水を汲み上げる面白さと水の気持ちよさに夢中。
村の名前の由来になっている「武生水の井戸」であった。



歩かないと見逃しがちで、車だとほぼ気づかない。この井戸と稲荷神社があることでかろうじて公園として鎮守の森が守られているが、その取り崩したであろう鎮守の森下の法面が痛々しく、かつ地図で見てもハザードマップでの危険エリアと重なっている。

写真下：YAMAP流域地図ハザードマップ版



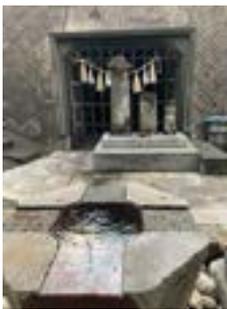
吉崎市立一支国博物館のサイトには、武生水の名前の由来が記されています。

武生水村には3つの由来があります。1つ目は、この地に日本武尊(やまとたける)の神を祀った社(やしろ)があり、その社の下から水が湧き出たことから、「武生水」の村の名まえがついたと云う説があります。2つ目は、この地で景行天皇(けいこうてんのう)の皇子(おうじ)日本武尊(やまとたける)を授かったことに由来し、湧き出る水を産湯として用いたことから、「武生水」の村の名まえがついたと云う説があります。3つ目は、この地に住んだ武士がこの湧き出る水を飲んで、士気を高めたと云う伝説から「カみなぎる聖水、体力がよみがえる魔法の水」ともてはやされ、その水を「武生水」と呼んだことから村の名まえがついたと云う説があります。

もともと、湧水は地域にとって命の水であったが、上下水道が引かれるとともに、その重要性は低くなっている。しかし先人たちが信仰という形で残してくれたスピリチュアルスケープは、時空を超えて、その重要性を伝えてくれる、それはその土地の防災にも関わる仕組みである。

C.常盤井

下記表で記載している通り、R5年度の調査でわからなかった「吉岐の七名水」の一つである「常盤井(ときわごう)」の源泉が今回の後述する報告座談会で知ることになる。

<p>常盤井(ときわごう)</p> <p>★★★★</p>		<p>この水は、武生水(むしょうず)という村の名前のもととなるくらい豊かな湧水があった。周辺には、樹木や鎮守の森はない。水量からみても地下水の組み上げの可能性もある。</p>	 <p>男根の祠と水神様が祀られている。</p>	<p>市の施設として整備するときに、湧水のエリアも同時に整備しているところに、地域の人たちが行政も含めて大切だと理解している一例かと考える。</p>
-------------------------------	---	---	--	--



子どもたちはこの場所からずっと離れなかった。水で遊び、笑い、探検し、命の時間をすごしていた。翌日もまた行きたいと行った場所である。

この水源はこの柵の奥にあることが判明。この汲み場を壊し、道路175号線を通すことを地元の人々が反対し、この空間をつくり、源泉を手前にまだ引っ張ってきている。ある意味、神々の上に道路が通っている状態をどうみるかは、横に置いておいて、写真を撮ることをわびながら、その源泉場が確認できた。この源泉は「常盤山」からの水ということだが、その常盤山がどこの森をさすのかは判明できなかった。



写真下:道路の真下に空洞があり、そこに元々の常盤井がある。
柵の間から写真を撮ったが、その柵には鍵がかけられつつも、中には、御幣(ごへい)があり、今でも地域の方々の信仰と守られている様子が伺える。御幣とは細長い木や竹の串に特殊な形に裁った紙垂(しで)を取りつけた物で、神への捧げ物であると同時に、神を招くための依り代や、祓いに必要な道具や御神体そのものになる。そこから水が引き込まれているのがわかる。その間から伸びてくる植物や根っこが、自然のたくましさを感じる。



D.武生水第6水源から永田ダム

徐々に「触」らしさが漂うエリア。ただ、水を辿るには、歩くことしか入れない壱岐る道。(写真右)
道路の高低差がかなりある場所があり、その途中にある水源は、どれも上水として汲み上げる機械と柵に囲われている。(写真左)



この先で行き止まりとなり、川沿いを歩くことはできなかった。茂みの先に永田ダムが続く。

(1)-4、考察

歩かないとわからない発見が、住んでいる壱岐市の住民の方々にもあった。すでに地域愛が強いメンバーであったが、どの井戸もルートも初めて歩く。また反応が正直な子どもたちは、暑さで「帰ろー」と最初行っていたのが、水にふれ、見たことがない景色や感覚に触れることで、目に見えて元気に生き活きとしてきた。次の日もいきたいとせがまれたほどである。実際に常盤井には二日間通い、その後、図書館にも足を運び調べる大人の姿で、学ぶ楽しさを伝えられたように感じる。

地域の水循環を辿るだけでも、自然資本の重要性と人間への影響の大きさに気づく実証ワークとなった。井戸からの湧水は、古来から地域にとって命の水であったが、近年、上下水道が引かれるとともに、その重要性は低くなり、土中に隠されている。しかし先人たちが信仰という形で残してくれたスピリチャルスケープは、時空を超えて、その重要性を伝えてくれる、それはその土地の防災にも関わる仕組みである。

壱岐島において「浦」は海を媒介とした対外的活動の拠点であり、外へ開かれた窓口の役割を果たす。「浦」は密居集落であり、農地を持つことが出来なかったが、それによって「触」は農地を最大限確保し、生産を高めることができた。対照的な二つの世界を結ぶものとして、市(いち)が成り立ったことが歩いてわかりやすい。相互の交流の場ともなっていたその市の名残が「商店街」である。その商店街は、道路ができたことで、車移動が促進され「歩いて」生活する暮らす範囲での営みが少し影を落としている様子もわかる。これは壱岐だけではない、全国的な状態である。

常盤井に象徴されるように、道路や市街地としての開発の中にも、人々の中に守られた信仰と水の循環は、息絶え絶えのようにも思える。「歩けるまち」WalkableCityの重要性が問われる中、歩くことで見える暮らしの中にある祈りとその景色(スピリチャルスケープ)、歩くことで心身の健康にも貢献し、誰かと立ち話できるコミュニティの接点ができ自然とゆるやかにつながる社会的健康、ウェルビーイングの向上に貢献する。初年度の健康に関する調査で、車依存による健康への悪影響が原因とされていた解決とともに、大きく舵を切れる全国に向けてのモデル地区になることを期待できるエリアである。4P成果物として、このエリアにおけるウェルビーイング・ビジョン・マップを別紙として添付する。

(2) 潮の満ち引き瞑想と海の御旅所

(2)ー1、実施内容

A. 潮の満ち引き瞑想 in 小島神社

2024年9月17日(火)後述する報告座談会終了後、通年で続けている小島神社での潮の満ち引き瞑想を行った。参加者は吉崎市民4名、他府県からの参加者1名である。令和4、5年ともに実証ワークを行ったプログラムから、潮の満ち引きを感じながらの瞑想だけに特化して行った。



実施場所の小島神社は、自然信仰の御神体そのものである小島までの道が潮の満ち引きを実際に目で見ることができる場所である。(写真左:満潮時)干潮の時間になると、小島神社に続く、参道のような道が出現する。(写真右)

(内容)

- ・5分間の呼吸法
- ・気になる岩や石を見つけて、それを半眼で眺めながら、15分間水面の移り変わりを眺める瞑想。
- ・感想をシェア

(感想)

- ・島に住んでいるのに、こんなにゆっくりとした時間を送ることはほとんどなかった。
- ・とてもスッキリした。
- ・この短い時間で潮の満ち引きが身体で感じられた。すごくクリア。
- ・また自分でもやってみたい。



(考察)

いつも渡れない参道を渡り、ただ観光として訪れるだけでなく、体感をともなうプログラムは、身体に刻まれる定番のプログラムに昇華してきている。目に見えてわかりやすく自然の変化が見える小島神社の参道を歩くことは、観光にとっても目玉の一つになっている。干潮と満潮の時間が季節によって変わることさえも、知らない人たちにとって、とても大自然の営みを享受できる場所である。同時に、たくさんの観光客が参拝することによ

て、地元から「小島さん」と呼ばれる御神体である海に浮かぶ小島は、地盤のやわらかい鎮守の森で、さまざまな場所が傷んできており、帰りには、氏子総代とも偶然お会いして、その大変さを語ってくださった。(写真下) この危機を多くの人に知ってもらい支援していただくために、クラウドファンด์という形で取り組まれ、59日間に555名(他に代理支援数約200名様)を超える方々から10,755,000円ものご支援金を集め、修復の真っ最中に立ち会えることができました。

参考)長崎県壱岐島の海に浮かぶ神域・小島神社 | 参道崩落の危機にご支援を

<https://readyfor.jp/projects/kojima1000>

新しい形の支援が何度も危機を乗り越えてきた壱岐島ならではの感銘するとともに、住んでいる人たちにとっての信仰、祈りの場所に「お邪魔させてもらっている」そして「また違う形でお返しをしていく」そんな謙虚な気持ちと畏敬の念を伝えることなくして、ウェルビーイング・プログラムとは言えない。さまざま地域の信仰と祈りの場を旅してきた筆者にとって、この気持ちを持たずして、訪れるべきではないとまで思っている。あの世とこの世の境目の曖昧さが暮らしの中にある今、その感性を養うことこそ、この信仰と祈りがいつの時期でも当たり前にある壱岐島における鎮守の森コミュニティ・プロジェクトの大切なミッションなのだと、再確認した。



(写真左) 氏子総代さんからの説明



(写真右) 季節の祈りの後が駐車場のそばに

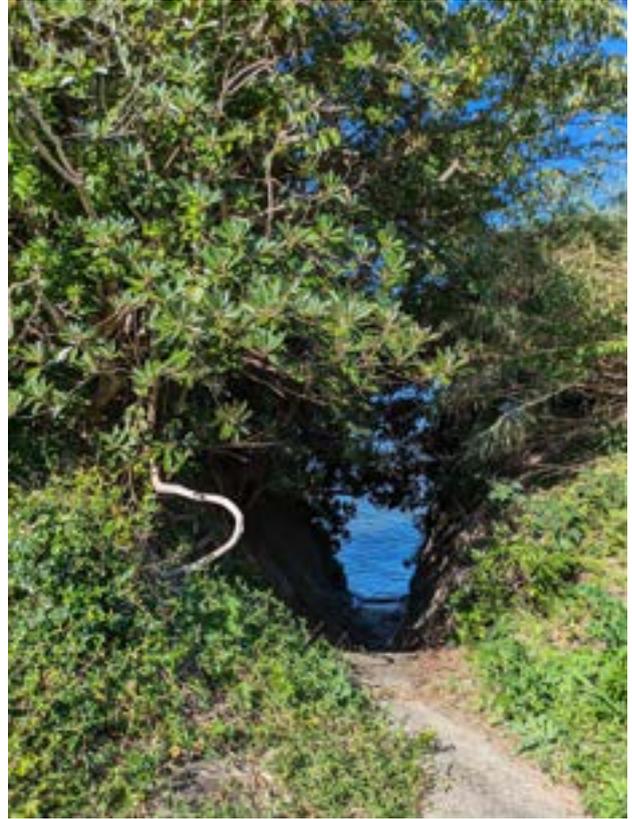
B.海の御旅所-比賣神社(里舳)-

訪問前に、奈良県御所市の高鴨神社が毎年壱岐島を訪れていることを知ったので、事前に鈴鹿宮司にヒアリングをさせていただいた。壱岐島の里舳にある比賣神社の甲冑(壱岐博物館に実物あり)を着て船で大祓え人形を流していたのが延喜式神名帳に記載があり、自分の代から実践されているとのこと。古代の方々が霊的にも能力が高いと宮司は考えておられ、高鴨神社では、調べて記載されている確実なものだけ少しづつ実践されています。その一つとして、比賣神社には、日本最古の神社のひとつ、奈良の高嶋神社から分祀された下照姫命(したてるひめのみこと)が祀られているご縁とともに、大祓え人形の流しだそうで、他にも神社行事を地域が困らない行事だけ旧暦に戻しておられます。

比賣神社の氏子さん桂木さんに比賣神社の御旅所を案内していただきました。御旅所には神社や祭神にまつわる場所や氏子地域にとって重要な場所が選ばれているので、もともとその地域の自然信仰や在来信仰の形がみえる場所です。神社の海岸にあるお旅所(写真)から出立、海夕日に向かって小さな島を超えて流れる。山の神様と海の神様が出会われる、その行事に必要な古代からある真菰(まこも)も、今では壱岐島でご準備できる関係ができており、10年以上にも渡って、継続してきた強い絆を感じます。真菰は、稲作文化が伝わる

以前の縄文時代より、食料にしたり屋根を葺いたりなど、衣食住すべてにおいて利用されてきました。水質浄化や護岸の再生に真菰は活用されている地域も徐々に増えています。またマコモダケの効用も注目され、効果や効能については、古く中国で書かれた薬草書「本草綱目」に、「五臓(心臓・肺臓・肝臓・脾臓・腎臓)の邪氣を利し、毒を消す」と記されていますが、現代医学が発達してから現状は研究途中ですが、スーパーフードとして、注目されています。この真菰を今後も栽培されていく壱岐島の真菰再生に可能性を感じます。

(写真上左)小島神社同様、干潮に現れる小島(写真上右)この里道を神輿が通ります
(写真下左)海岸沿いの御旅所・目の前のブロックがない時は小島が一望できたそうです
(写真下右)比賣神社(里舳)



(3)暮らしの中の森林「せどん山」と民間信仰「子ども相撲」

前回2023年12月20日に訪問した背戸山—屋敷—前畑を1単位(図1)とした平戸藩により行われた土地割替制度を基盤が今でも残る集落に再び訪れ、せどん山(背戸山)とは別に集落で大切にしている鎮守の森で開かれる子ども相撲に参加させていただいた。

(図1) 壱岐市発行 景観の特性

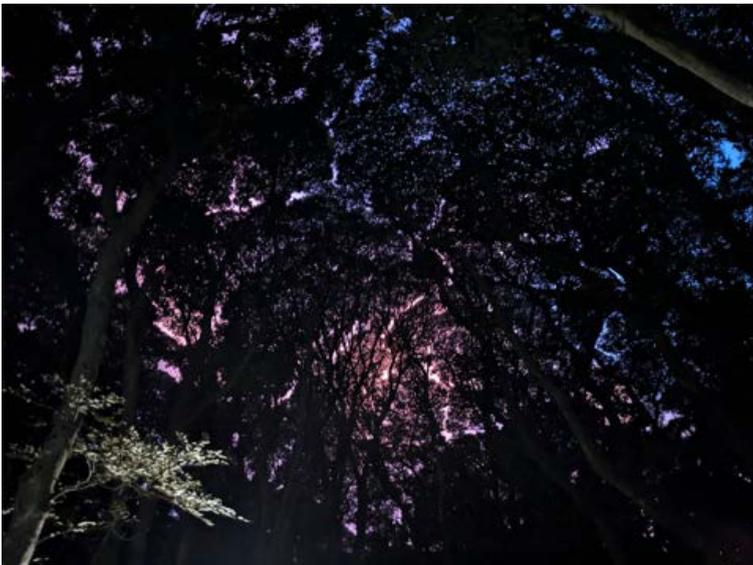
<https://www.city.iki.nagasaki.jp/material/files/group/18/chapter2.pdf>

まち並み景観より



図：「触」の散居住宅の配置パターン（平面図、立面図）

(写真下)は、夜のとばりがおりはじめるとともに、細い道を歩いた先にある鎮守の森の懐へ。鎮守の森に包まれた感覚と夕焼けの空が、今からは神々の時間、あの世の時間になるのだと教えてくれるような空が、空気を変えていく。



(写真右)鳥居の先には、壱岐お馴染みの形をした石祠が、この鎮守の森の中心に。その前で、子どもたちは相撲をとる。



(写真上) 神様の前で子ども相撲。(写真下左) 土俵には塩と御幣。(写真下右) 実際に賞金も



(写真上) 鎮守の森をにコミュニティが世代をまたいで集まり、相撲をとる。外部の人間である筆者も暖かく迎えてくれた。御神酒もお下がりいただけただけが何より嬉しい。相撲には、地鎮という神事の要素から、身体を鍛えることなど、さまざまな役割があると言われている。以前、修験者が相撲を撮る時、裸足になることで一番身近な鎮守の森の微生物を素肌に植えつけて、心身の健康につなげる要素もあると聞いたことがある。子どもたちの元気な様子を見て納得する。年配の方に、細かく所作を聞く様子を拝見し、世代のつながりが壱岐島に今でもさまざまな地域信仰が継続されているのだと、大勢とは異なった地域に残る在来信仰の力強さと素朴さを拝見できたことは貴重である。快く迎えてくれた皆様、その集落をつないでくれた澤田先生に心より感謝申し上げます。

(4) 番外編: 戸隠神社追儺祭参仕から見える日本の精神性「鬼と来訪神」

杵岐島とは異なる場所であるが、先日戸隠を訪れた。修験道との長く深いご縁があり、日本全国の特に本州を中心とした自然信仰が色濃く残る場所を訪れている。地域における在来信仰には、さまざまな形の「鬼」が関わる民間信仰がある。時に鬼は、言葉も含めて理解ができない外来からの脅威や、外来がもたらす疱瘡(天然痘)などの伝染病の脅威を現し、時に得体の知れないものに対して、手っ取り早くイメージをつけられるのが「鬼」であった。それは都合よく、そして時に鬼神という神にもなる。神楽が伝えていることと、自然信仰と鬼の役割は、人間の本質についての「仮面」として現れるのであろう。日本の精神性が見て取れる反面、深く複雑な鬼。

杵岐島においても杵岐神楽には猿田彦の舞があり、前回でも注目していた。今回、戸隠神社で数年前から復活に関わった方々のご縁により追儺祭に参仕してきた。追儺祭と「よくわからない畏れ」を包括する鬼とその役割を少し記載しておく。

京都、吉田神社の追儺祭を通して追儺とはを記載した「第二章 追儺における鬼」浜本隆志 著・2010 関西大学学術リポジトリからみてみよう。

「儺」という字は、「人」と「難」で成立しており、「人」は火、「難」は旱魃、落雷、山火事などの災難を指すゆえに、この「儺」という字そのものが「人が火で、悪鬼を祓う災難よけの行事」(『漢字源』)を意味しており、すなわち「追儺」と同義である。(中略)

日本の宮廷で「儺」がおこなわれたことが、平安初期の歴史書に記録されているが、前出のように、もともとは中国の宮廷行事が伝来したのが起源である。そのため、中国での由来に遡及することから、追儺の歴史をたどってみよう。

仏教においては、鬼はすべて邪悪なものとしてされ、悪鬼とされるが、中国では元来、鬼はすべて邪鬼や悪鬼ではなかった。「人ノ帰スルトコロヲ鬼キトナス」(『説文解字』)、「人ノ死スル、ミナ鬼キトイフ」(『礼記』)とあるように、死者の霊こそが鬼であった。しかし、この鬼にはふたとおりあって、天寿をまっとうして亡くなった死者と、非業は凶の最期を遂げた死者である。前者は子孫によって供養され、〈祖霊〉として祀られて、〈鬼神〉となるのだが、後者まがたま魂となって、供養も祀られることもなく、さまよう〈死霊〉として〈悪鬼〉となるのだ。そして、この二種の鬼神の登場する仮面劇を「儺」鬼のあり方に、追儺の原型をみることができる。すなわち、〈鬼神〉が〈悪鬼〉を祓うという構図である。中国で「戯」というのであるが、方相氏はこれに登場する悪鬼を祓う鬼神、しかも四つの黄金ぎの目をもった鬼神なのであった。」

鬼が日本の記録に最初に登場したのは『出雲国風土記』であるが、「目一つの鬼」と記述されている。

馬場あき子氏による鬼と神の同起源説の検証では、日本の鬼の分類を5つに分けている。

- 1 最古の原像としての鬼(祝福にくる祖霊や地霊)
- 2 道教や仏教を取り入れた修験道のなかで発展をとげた山伏系の鬼や天狗
- 3 仏教系の邪鬼、夜叉、羅刹
- 4 放逐者、賤民、盗賊などの凶悪な無用者が鬼と呼ばれるようになった者
- 5 怨恨、憤怒、雪辱などによって復讐をとげるために鬼になった者

1が神道系、2が修験道系、3が仏教系であって、共通するのは、人にあらざる者の鬼であり、4と5はもともと人間であった者が変化した鬼と特徴づけることができるだろう。

としている。杵岐島ではそれにもう一つ大陸から来る言葉も含めて理解ができない外来からの脅威でもあり、外来がもたらす疱瘡(天然痘)などの伝染病の脅威でもあるように思う。元に杵岐神楽、猿田彦の舞(写真右)



では、鼻が長く誇張された天狗面よりもより鬼に近い面をかぶっている。

前述した「第二章追儼における鬼」2010浜本隆志著では、「天狗のイメージ形成に寄与した伎楽面は、日本の神話に登場する猿田彦とも関連づけられている。猿田彦の怪異のような眼は八つな容貌は長大な鼻で知られるが、『日本書紀』巻第二の描写によれば、長軀、光る口もと、そして、赤いほうずき咫鏡(やたのかがみ)のごとく輝いたという。猿田彦がその赤い眼で、高天原から地上へ向かう八〇万の神々を金縛りにしてしまったエピソードは、猿田彦がまさしく邪視の力をもっていたことを証言するものだ。その外見と能力ゆえに、猿田彦は天狗の先祖とみなされてきた。

方相氏、天狗、猿田彦は、その特徴に共通点がみいだされることに気づくだろう。日本の神話、修験道を媒介にしながらも、この三者は容貌怪異にして、鋭き眼光をもち、異能の者であること、ひとことではいえず、いわゆる「鬼」のイメージを共有しているのだ。方相氏が、鬼を追い払う者から鬼として追われる者へ変わっていった要因のひとつは、このあたりとも関係しているかもしれない。(中略)日本では、方相氏は中国から大儼という儀礼とともに伝来したために、その存在は(仮面もふくめて)当初から来訪神としての位置づけをもっていた。

そもそも、外来の儀式のなかで用いられる仮面であったゆえに、古代においてはますます呪術的な信仰の対象であったにちがいない。

それゆえ、仮面にも神性が宿るとされることもあった。一部の寺社では、追儼の儀式で使われていた仮面じたいがご神体そのものとして大切に祀られていたことがその証拠である。

眼にみえない神ではなくて、人間がみることができずがたをした神が季節を定めて、または場所を定めて訪れてくるのは、共同体をふくめた世界の秩序を特定の時間に再構築するために、来訪神儀礼が営まれてきたと、諏訪春雄氏は述べている(諏訪春雄・川村湊編『訪れる神々』)。

『国文学の発生』(第三稿)において、折口信夫は「客」を「まれびと」と訓読みする事例から、この語の原義を説く。「まれ」とは、「最小の度数の出現または訪問」をいう語であって、「ひと」は人間の意味になる以前は、「神および継承者」を意味した。したがって、「まれひと」とは「来訪する神」にして、「人の扮する神」でもあり、時を定めて来たり訪う存在であったとしている。(中略)帰するところ、儼をおこなう方相氏という存在には、人間の知恵や思想がさまざまなかたちで宿っている。まずは、人間の生死に関する思想、つまり古代からのアニミズムに由来する鬼や、邪悪におちいった鬼を恐れながらも、祖先の霊に守護を祈願する思想。これには、悪鬼の存在をみとめながらも、同じ鬼の力によって悪鬼を退けようとする、「毒を以て毒を制す」といった知恵も含まれる。また、冬と春、一年の終わりと始まりという暦や季節の区切りに、太陽や植物などの自然の死と再生をみいだす考え方。さらに、邪を退け、福を呼びこもうとする除災招福の習俗のほか、爾来の農作物豊作を祈願する農耕儀礼の性格をもっている。そして、生物の眼に超常の力が宿るといふ邪視についての信仰、およびこのような力が仮面にも憑依しているという信仰。

すなわち、人間が古来からいっていた自然全般に対するさまざまな感情、たとえば自然への願い、祈り、恐怖、畏敬など、くわえてこれらを含む世界観ともいうべきものが、儼という儀式とこれをおこなう方相氏の役割のなかに看取されるのである。



(写真上)戸隠神社追儼祭における戸隠神社、太々神楽”岩戸開の舞”での天手力雄命の面もまるで鬼のお面のようである。

想像を絶するような畏れ多い力をもつ、得体のしれない力をもつ、外からやってくる人を、豆をまいてやっつける鬼なのか、その特性とともに”受け入れていく”来訪神としての鬼と捉えるのか。そこでまた鬼の捉え方も変わってくる。戸隠神社と対をなすとされる天河神社は、「鬼も内、福も内」である。

冬には入ることができない戸隠奥社に祀られている九頭龍大神は水の神様である。中社のすぐ近くにある宿坊であり寺院である「久山さん(久山館)」には、その九頭龍大神を本地垂迹した九頭龍弁財天像がある。これも大陸からの仏教をどうにかして”受け入れていく”、日本ならではの形が残っている。



戸隠修験の全盛期にあった周辺にある宿坊には、院の役割をになった神棚と仏像がどの宿にある。今は、観光旅館の面が色濃く出ているが、どこの宿坊も、宿のオーナーであり神職であり、朝のお勤めをしている。私が泊まった宿坊「横倉さん」も、前日私たちの夜ごはんをたくさん並べてくれていた優しい笑顔の若者が、朝のお勤めには神職となり、朝ごはん時にはご飯を並べてくれ、昼の追儺祭では神楽を舞っていた。先人から大切にしてきたものを暮らしの中で、大切に継いでいく形が、壱岐島から遠く離れた戸隠でも残っている。これが日本のたくましい精神性である。



4、社会実装に向けて

(1)報告座談会

本プロジェクトは、神々の島と呼ばれる壱岐において「鎮守の森」のルーツの場所としての性格を持つ地域資源を生かしながら、自然信仰と一体となった心身の癒しや地域再生を軸として、人間と自然が共生する新たなモデルづくりを目指しています。2023、2024年と続けて壱岐島の皆様に、調査やヒアリングに大変お世話になりました。お忙しい中、こころよく熱く、こちらの質問や率直な疑問に答えていただきました。2年にわたっての報告し、今後のことや、今までの調査に関わってくださった方、また壱岐島に住まわれている関係者に向けて、壱岐島のまだ知らないことを聞かせていただく2023-24年度の報告・座談会を行った。

(1)-1、概要

2024年9月17日(火)

2023-24年度報告会 13:00-14:30

倉橋特別研究員より「当プロジェクトの2023年からの報告と今後の取り組み」13:00-14:15

中村研究員よりオンラインにて「壱岐島における水の循環についての報告」14:15-15:00

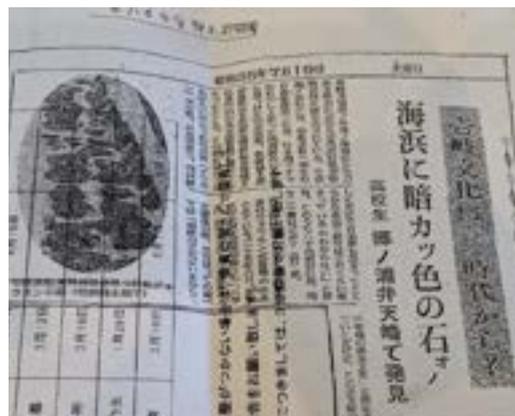
軽食付き座談会 15:00-16:00

場所:フリーウィールスタジオ

参加者:壱岐市民7名・オンラインにて島外参加者1名・中村研究員

(写真下左)壱岐の風土からできた縄文漬物に壱岐の銘菓である「かす巻」を食べながら、ざっくばらんに意見交換を行った。(写真上)また常盤井の湧水源泉場所が道路の真下にあったことも判明し、まだまだ奥深い壱岐島である。

(写真下右)郷ノ浦で縄文遺跡を発見したのは当時の高校生。そのご親戚の方も参加していただき、貴重な情報をくださった。



(2) 訪問後の意見交換

鎮守の森・壱岐プロジェクトについて意見交換を行った。鎮守の森コミュニティ研究所から3名の研究員と、一般社団法人壱岐みらいサイトより1名、オンラインにて以下の議題で行った。

・壱岐市の動向共有

行政は民間先行・法整備や補助の窓口で支援。市長の公約は、健康・福祉も重点事項。篠原市長の最大の公約である郷ノ浦地区での玄州会新病院建設とそれに伴う病院跡地の壱岐市主導によるコモنز化「郷ノ浦商店街の復権」のコンテンツとしての活動という位置づけを模索。

・鎮守の森コミュニティ研究所側が提供できる内容の意見交換

福岡1600万人の皆さんを壱岐島に医療・福祉の側面に来ていただきながら、島民の方々の当然の医療福祉だけでなく、死ぬ前から始まっている生きているうちの死に向かう認知行動療法をさりげなく差し込み、島民の健康や幸せにつなげる。

壱岐島が元々持っている「おもてなし」「外からを受け入れる」メンタリティーを生かし島民の自己存在につなげ、ウェルビーイングの向上に貢献できれば。

5、成果品

以上の報告書

別紙1:4C_ビジョン・マップ